

---

# 人間そんなもんだ。

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人間そんなもんだ。

### 【NZコード】

N9169E

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

同じ高校に通う4人の人間模様。彼等は仲がいいように見えるが、その真実はいかに？

とある高校に4人の仲のいい？生徒がいた。  
？がつくのは外からみて仲が本等にいいのか認識しづらだからだ。

杉並卓三、柘山陽子、督城イナギ、蚯蚓正一。  
この4人の事なんだけど……。

「よー卓三ー。」

朝はやく登校途中にイナギがでかい声で卓三に挨拶をした。  
イナギは金髪で肩まで伸びたロング、ゲジゲジ眉毛にたらし。  
とてもかっこいいとは言えないだろう。

「…………」

「おい、無視すんなよ、もっと明るくいきよ!せ」

「もう一度いうぜ、おはよーー。」

「お……は」

卓三君は立ち止まらず、だからと言って彼に振り向きもせず  
途切れる挨拶を、ぼそとした声で言つた。

「なんだよなんだよ、元気ねーな」

車が後ろから猛スピードで近付いてくる。

ここは細い道路だ。道路の右側を歩いているイサギ君。

その更に右の歩道を歩く卓三君。

突然！ 卓三君のとろとろした足鳥が俊敏なものに変わった。

「あ、あぶない！」

イサギの背中に勢いつけてドロップキックした卓三君。  
車の前に踊り出るイサギ。

振り返ると、車はもう田の前だ。

「ひ~~~~~」

蹴りが足りなかつた……

卓三君は、もう諦めたのか、イサギの死を半ば承諾しつつ、田を押  
さえてその時を待っていた。

その刹那、更に黒い影が調子よく現れたかと思うと、卓三の向こうい  
側からイサギをすぐにひっぱる。

間一髪イサギは車の追突から逃れる事ができた。

「は~~~~~は~~~~~」

大汗搔いて息を荒ぐするイサギ。

「危なかつたね、イサギ君」

「僕がもう少し遅ければ君はカエルの轢死体のよくなつてたよ、

B O Y

「ハアハア、サンキュー正一」

「なあに気にする事はないや、家を早めにでてよかつたよ～、ああ僕はなんて幸運な奴だ」

「イサギ君に恩を着せる事ができたよ～」

調子よく色々くつやべつてゐる男の名は正一。

長い黒髪を後ろに束ねる美形の少年。鼻はすっと高く、耳にはイヤリングをしている。

取りあえず、正一はおいといて……

イサギはさつきの蹴りを放った真相を卓二郎に尋問しようと、駆け寄つた。

田は血走つてゐるし、今にも掴みかかりそうだ。

「や、貴様へ、なんであないな事しやがるんだえ」

イサギ君は切れると関西弁が発動する。

襟首を掴んで上に引き上げると体一と詰め寄る。

「た、助けよつとしたんじやないか……」

「ジリがや～俺死にかけたやん、正一君がひっぱつてくれなもや」

「今頃、死んでたでー」

その言葉が心に刺さつたのか、卓二郎は俯くと一瞬黙る。

「「」ぬさんよ」

「でも、善意でやった事なんだ……」

「あの車は君をひき殺そうとした」

「やつと思つた俺は咄嗟に体が動いたんだ」

「ひき殺やつて……?」

「俺なんにも恨み賈つひくな事してへんで」

隼三君が、田を細べこへイサギ君を見つめる。

「本人が氣づかないひし、相手の心を傷つけぬ……」

「良くある話や……」

イサギ君の首を持ち上げる手を足で払はとい、隼三君はスタスタ学校の門へ入つていった。

「俺が……?」

手を震わせながら自分の行いを振り返るイサギ君。

「ハハ、ほりやー本とられたね、イサギ君」

「なーに、気にする事ないわ、それのはただの暴走車や」

「君みたいな良い奴を殺そだなんて考へる奴はいないよ~」

「 わあ、やつを助けたお礼に何をしてもらおうつかな～？」

正一君はお礼をもらえたことを前提に話を進める。

頭を真剣に悩ますイサギ君の深い動搖はそつちのけだ。

一人が道路の左側に寄り固まり、話を続けている時突然大きなぞきつい声がした。とても迫力のある声だ。

「 どけよ」

「 やあ、これはこれは陽子ちゃんじゃないか」

「 今日は『機嫌いかが～？』

陽子はいわゆる不良と呼ばれる少女だ。

茶髪はもちろんだが、手にはぞきつい金色の腕輪をしていて、平べったい靴。

薄っぺらいカバン、田に濃い紫のシャドーがぞきつい。

「 ふん、最悪だよ」

「 ははん、また母上とケンカでもしたのかな～だからあれほどじつも……」

正一のまたぐらに蹴りが入った。とても強烈な蹴りだ。

「 お～～～の～～～！」

その場で金的を押さえ込みながら、足を八字にして体を振るわせる正一。

涙目で顔を青くしていた。

「べりべりしゃべるからだよ」

「あたしゃ、その長い台詞聞く忍耐はもつてないんでね」

「なに下向いてるんだよ、ほらこくよ、イサギ」

彼はまだ悩んでいたが、陽子が彼の右手を強引にひっぱり学校の中へと連れ込んでいった。

正一と陽子は実は恋人同士だ。

「This is a pen」

英語の授業が始まると、正一は考え込んでいた。  
普段明るい正一だが、悩みだと長い。

俺は知らず知らずのうちに他人を傷つけているのか?  
何がいけないんだ、どこがいけなかつたんだ。

隣の席の陽子が正一のゾンビみたいな顔をみて言った。

「どうしたよ、正一」

「今日は変だよ」

「いや、俺つてさ、結構周りに恨まれるタイプ?」

「そんなことないよ、なにつまらない事で落ち込んでるのよ」

「実はや……」

### 休憩時間

陽子がイサギの朝の出来事を聞いて、憤慨したのか卓二の席に早歩きで迫つてこく。

「おこ、卓二」

「てめー、今日イサギにつまんない事言つたんだってね」

「どうもつもつだーー！」

「陽子ちゃん……」

多少怯えながらも心は穏やかな卓二。彼はこれくらいの修羅場は、何度も切り抜けていて動搖は全くみせない。

「ある一例を述べただけさ」

「それが余計だつて言つたんのよ」

陽子ちゃんは逆上すると、彼の襟首を持ち上げる。行動パターンはイサギと似ていた。

「相変わらず、荒らあらしきね」

「何でも暴力で解決できるって思つてゐるところが駄目だ」

「陽子ちゃんもイサギと回りつけ」

「ただ君の場合、恨みはもつと眞つてそうだけだね」

締め上げる襟首から手を離し卓二郎を地面に置いた。

「ふん… 恨み上等だよ、そんなものいくつもあつてこそ人間なんだよ」

「敵もないような人生なんて、楽しくもなんともないよ」

「なら、いいじゃないか…、イサギ君にも気合のこもった敵がいたつて分かつたんだし」

「逆に君は喜んであげないと」

「それとこれとは…」

「さて、便所に行くよ、君もつれてくる？」

「まさか」

「じゃ僕は行くよ」

卓二君は陽子ちゃんを諭破すると、満足げな顔を浮べ廁へスタンダ歩いていく。

とてもウンコがしたかったので、短くすんで助かったようだ。

どうか……イサギにも敵が……男はそつでなくつちや

なにやら独自の理論に当てはまって納得する陽子ちゃん。

卓三君がトイレから出でてくると、正一君がガールハントしていた。

「美鈴ちゃん、今日僕と一緒に帰らないかい~?」

「アイスクリーム奢つてあげるよ~」

「レバーレス！」

「じゃ決まりだね」

「わざと待てよ」

その一人の間に割つて入る卓二君。

「卓二君がいたのかな~？」

「俺は見たんだ、お前朝車の奴に指示していたよな」

「何の話だい？」

美鈴ちゃんは話が長くなりしきつたので、険悪な雰囲気を感じ取つてそそくわと去つていつた。

「ああ、美鈴ちゃん……」

うな垂れる正一。

「君の言いがかりで、彼女が逃げちやつたじゃないか

「黙れ、」の馬鹿やうひ

「俺は見たんだよ」

「車が突っ込んでくる前に、手をあの車にふって何か合図をしているお前の姿をな」

「ふ、見てたのか」

突然悪ぶれた顔に変わる正一。  
さつきまでの浮かれた顔が悪代官のよつた顔にスイッチした。

「そう、俺はイサギ君が嫌いだ」

「殺したいほどにな」

「でも、だからと書つて、イサギ君を死なせるつもりはなかつたよ」

「ちょっと入院してもらつて、骨の2・3本折つてもうつだけだつたんだよ」

「だから、足だけ踏ませるつもりで、彼を中途半端にひっぱたんだけど」

「力がはいりすぎて、結果的に助けてしまつたけどね」

「ふ……」

卓二君は下を向いて、笑い出した。

「ははは」

「お前とは『』があいたんだ」

「実は俺も奴の事が嫌いだつたんだよ」

「あの時、イサギをわざと蹴りこんだんだ」

「暴走車に惹かれるようにね」

「でも、蹴りが足りなかつた、体半分車の射程から外れていた」

「その上君が引っ張り上げるもんだから頭きたけど」

「まああの時はやりすぎたかなって思つて助かつた事に安堵したよ

「犯罪者にはなりたくないんでね」

「君も悪だね~、何か彼に恨みでもあるのかい?」

「理由は……たぶんお前と同じだ」

「フフフ」

一人に友情のようなものが芽生え始めていた。

「一緒にアイツをいたぶるわぜ」

「いいよ、いたぶる方法は君が考えてくれ

「てめ――らあああ

「全て聞いたぞ――！」

突然の大きな声、壁向こうにイサギ君が隠れていたようだ。

「ふ、聞かれちゃったかい」

「そのようだね」

「ま、まさか、仲が良いって思つてたお前等に恨まれてるなんて」

卓三が下を向いたまま押し殺すように笑っている。

「理由はなんなんだ？ 僕がなにしたってんだー」

「君は俺から大事なものを奪つた」

「何のことだ……」

身に覚えのないことを言われ、動搖するイサギ君。

「陽子ちゃんだ！」

「俺は彼女に惚れていた、あの逞しく、男っぽい彼女にな

「馬鹿な」

「お前が……あこつを好きだなんて」

田を丸くして卓二の顔をかみしめる顔をみつめるイサギ君。

「僕も彼女が大好きだよ」

便乗して激白する正一。

「あの野蛮で、どじとなく影のある雰囲気、その上美形の彼女」

「とても魅力的だ」

「君をえいなけば……」

握り拳をつくり体を振るわせる正一。

「ま、そりこいつ」とや

「やうやく、もひばれちゃったし、ま、これからも後ひく矢をつけ  
るんだね」

「こいつ、卓二君」

「うん、こいつ、正一君」

一人はイサギに冷たい笑顔を投げかけると、背をむけ一人並んで  
去っていく。

「.....」

しばりべ、その場で体を震わせ立ち止まっていたイサギ君。  
しかし、それも長くは続かなかつた。いからせた肩を下におろして  
安堵の息を深く吐いた。

「な～～んだ、俺が悪いわけじゃないじゃん」

さっぱりした口調でなにか憑き物があちたみみたいな表情を浮かべ  
るイサギ君。

「あいつと別れればいいだけの話」

「それで全て解決じゃん」

「最近うざがつたし、別れ話持ち出す良こ頃合だな

「別れりや奴等も気がすむだらつ」

「陽子探しに行くか！」

完



(後書き)

作者の独断と偏見と適当さが入り乱れています。  
勢いで書いた作品なので矛盾点も多々あるかと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9169e/>

---

人間そんなもんだ。

2010年12月14日20時57分発行